

持続可能なコミュニティと「メタ・ファシリテーション」

— 「なぜ質問」から考える創造的なコミュニケーションのあり方—

Sustainable community and “Meta-facilitation”

— About creative communication style through a critical examination of “why question” —

空閑 厚樹

KUGA Atsuki

要約

本論は、創造的なコミュニケーションのあり方とそのようなコミュニケーションが持続可能なコミュニティ形成においてどのような役割を果たすのかを検討する。和田、中田による「メタ・ファシリテーション」および堀越によるコミュニケーションについての四象限図を参照する。

「メタ・ファシリテーション」は、事実質問をすることで当事者の気づきを促す方法論である。この方法論は「なぜ」という質問は極力避けるべきであると主張する。なぜならこの問いが発せられることで、容易に理解可能な、都合のいい架空の物語が質問者と回答者の間に共有され、そのことが現実を直視することを阻むからだ。

本論ではこのなぜという質問が創造的なコミュニケーションにつながりうることを堀越によるコミュニケーションの図を用いて示す。上記の議論を踏まえ、持続可能なコミュニティ形成に不可欠な要素—脱依存、レジリエンス、創造性—において創造的なコミュニケーションの果たす役割を明らかにする。

Abstract

This essay defines creative communication and the role such communication plays in building a sustainable community. “Meta-facilitation”, as elaborated by Wada and Nakata, is a method whereby a questioner asks a respondent “fact questions” in order to increase the respondent’s sense of awareness of a particular issue. This method strongly advises the questioner not to ask “why questions”. Such questions allow the questioner and the respondent to share an easily understandable and convenient fiction, thus preventing them from facing reality. This essay analyzes Horikoshi’s four quadrant communication diagram to show that “why questions” can lead to creative communication. Evidence demonstrating the ability of creative communication to increase resilience and creativity and to break the dependency cycle will be presented to show that it is a factor necessary to build a sustainable society.

Key words: Meta-facilitation, Sustainable community, vulnerability, consistency, why question

はじめに

ファシリテーションとはコミュニティの課題解決の一手法である。コミュニティの課題とは、騒音など近隣居住環境をめぐるトラブルや都市部への人口流出や少子化などによる過疎化などが挙げられることが多い。ファシリテーターは当事者の気づきを促すことを通して課題解決を助ける。このようなプロセスは地域での課題に留まらず、世界規模で進行する貧困問題や地球規模での気候変動等グローバルな課題への取り組みにも求められる。ところで、コミュニティの課題解決の話し合いの場において「なぜ」という質問が多用される。「あの家はなぜ大音量でテレビを見るのか」「地域経済が衰退しているのはなぜか」等。それは、これらの「なぜ」という問いに対する回答が課題解決につながると考えられているからだ。しかし、課題解決のためには、この「なぜ」という問いを発することは極力避けるべきだとの考えがある。本稿で議論の出発点とする「メタ・ファシリテーション」である。

「メタ・ファシリテーション」は社会開発、国際協力の現場実践から提唱されたファシリテーションの手法である〔和田・中田（2016）〕⁽¹⁾。その内容は「事実」を聞く質問を重ねるというものである。和田、中田は「事実」を聞くことが当事者の気づきを促し、この気づきが課題解決の起点なることを多様な事例とともに示している。

「事実」についての質問（以下「事実質問」と表記）とは、時間と場所が特定できるものである。「いつ」「どこで」「誰が」「何を」がその具体例である。それ以外の質問、たとえば「どうだったか？」「どう思うか？」「どうしてか？」等、様態、感想、理由を問う質問は極力避けるべきと主張する。特に「なぜ」と理由を問う質問（以下「なぜ質問」と表記）については、この質問は質問者、回答者双方にとって理解可能で都合のいい物語の創作（意味づけ）につながりかねない」と指摘する。創作された物語は現実を直視することを阻み、課題解決を困難にする。

和田、中田によるこのような議論を踏まえ、本稿は「事実質問」と「なぜ質問」を創造的なコミュニケーションの視点から検討する。その際、「脆弱性」と「一貫性」の視点からコミュニケーションの在り方を検討した議論〔堀越（2013、2016）〕を参照する。そして、このような創造的なコミュニケーションが、持続可能なコミュニティ形成においてどのような役割を果たしているのか、具体的事例をもとに考察する。

以下、まず「メタ・ファシリテーション」の内容を事例とともに概観した上で（Ⅰ）、この方法論で避けるべきと主張されている「なぜ」と問う質問について検討する（Ⅱ）。その上で、この「なぜ質問」が創造的なコミュニケーションにつながるための条件を、脆弱性と一貫性の視点から検討し（Ⅲ）、その具体的な現れ方を持続可能なコミュニティ実践を取り上げて検討する（Ⅳ）。

Ⅰ．「メタ・ファシリテーション」について

「メタ・ファシリテーション」着想の背景には、次のような問いがある。すなわち「人々は本当に援助を必要としているのだろうか」「私たちの援助は、本当に役に立っているのだろうか」〔和

田・中田 (2016), p.16] である。この問いで問われているのは「本当」であろう。つまり報告書作成のための「形だけの」「表面的な」援助事業はなされているが、その事業の多くが目的を達成していない（援助の成果として寄贈された器材や施設がその後使われなくなる、地域住民の自立を目的とした事業が却って住民の援助団体への依存を高める等）という。この現実から発せられた問いである。「本当」に近づくためには援助者と被援助者間に「本当」のコミュニケーションが必要であるが、実際には「本当」を知ろうとするコミュニケーションそのものが「本当」を遠ざけている場合が多くあることが示される。

その例として上書で紹介している井戸掘り支援エピソードをみておきたい。援助団体職員だった中田は、東南アジアのある山村で村民たちと一緒に活動について以下のような話し合いをしたことがあるという。「この村の一番の問題は何ですか」から始まる中田の問いに、村のリーダー格の男性が応じていく。「子どもの下痢が多いことです」「何が原因ですか」「きれいな水がないことです」「水はどこでとってきますか」「近くの池です。でも池の水は汚れています」「井戸はありますか」「ありません」「私たちが援助するので作りませんか」「そうであればありがたいです」。

井戸設置に関するすべての経費や作業を援助団体が担うことは村民の自立を阻害することになると考え、設置作業に伴う労働力は提供してもらうことにした。また、設置後は村民たちが責任をもって保守管理をすることを約束して井戸は完成する。ところが、完成当初は使われていた井戸は一年も経たないうちに使われなくなったという。

このやり取りのどこに問題があるのだろうか。中田は「本当」にこの村の役に立ちたいと思い問いかけをしたのだろうし、村のリーダー格の男性も「本当」に思っていることを返答したに違いない。しかし、そもそも中田はこの村は貧しく、何か問題があり、援助を必要としているはずだという前提で質問を始めている。またリーダー格の男性は村外から来たこの男性が何等かの援助事業を実施するためにこの村に来たことを知っている。このような状況で「何が問題か」と問われれば、「私たちの村に問題はありません」と応じる場面を想像するのは難しい。得られるかもしれない援助を逸してしまうかもしれないからだ。そこで、とりあえず相手が期待している回答をする。特にこの場合、具体的に井戸の提供が提案されたわけだから断る理由はない。

たしかに下痢の子どもがいるというのは本当かもしれない。しかしそれが「多いのか」否かは確かめることができない。また、たしかにその原因は清潔な水が入手できないことかもしれない。しかし、原因は他にあることも考えられる。さらに根本的な問題が他にあり、下痢の子どもがいるというのはその一つの現象かもしれない。そもそも村人が本当に井戸を必要としていたのであれば、一年も経たないうちに使われなくなるということはないだろう。

このようなコミュニケーションが現実認識を阻む原因として、「Mのコミュニケーションの罫」をみておきたい [和田・中田 (2016), p.35]。手書きで角を丸めて「M」と画用紙に描き、その画用紙の周囲を囲むようにして4人以上の人が等間隔で座る。すると、画用紙の正面に座った人には「M」のように見えるが、右側に座った人からは数字の「3」、左側に座った人からは「E」、反対側に座った人からは「W」のように見える。ここで、正面に座った人が、反対側に座った人

に「これは何ですか」と質問したところ、問われた方が「アルファベットのMではないか」と答えた事例が紹介されている。回答者（反対側に座った人）は、質問者（正面に座った人）からどのように見えるかを想像して答えたのだ。このようなコミュニケーションが上記の例でも見られたのだ。村のリーダー格の男性は、中田から見える現実（この村で何等かの援助事業を実施する意図をもってみている現実）を想像して答えていたということになる。

「本当」のコミュニケーションは、質問者が回答者の現実（W）を知ることから始まる。しかし、国際協力の現場において被援助者は援助者の見たいと期待する現実（M）に合わせて回答する。これは、実際に援助を得るための合理的な判断である。このように回答者が質問者の期待に沿うように答える例は、親子、介護者と被介護者、教師と学生、雇用者と被雇用者においてもみられるだろう。質問者は回答者の「本当」を知りたくて質問をする。しかし、その問いかけが適切になされなければ、かえって「本当」を遠ざけることになりかねない。それでは、どうすればいいのか。

「事実質問」をすべきと両者は主張する。上記の例にいうならば、部外者として村に入ったら、気になることを事実即して質問していく。たとえば、池で水くみをしている人に出会ったら、「ここで水くみをするのを教えてくれた人は誰だったか覚えているか」「汲んできた水はどこに保管しているか」「前回汲んだ水は飲料水として利用したか」「その水を飲んで体調を崩した人はいたか」等である。これら、「知識」「経験」「記憶」を問う質問はすべて場所と時間が特定できるものであり、回答者は自分の現実（W）から応答できるものである。質問者の現実（M）を想像する必要はない。このような事実質問を重ねていくことで、回答者が現状の課題を理解し、課題解決に必要なことを自ら気づく手助けをすることができる。これは、後述するように回答者が自ら自分の、もしくは自分の属するコミュニティの問題（弱さ）に自分で気づくということである。

このような視点から対話の現実を見直してみると、日常会話、公式な会議、討論の場等において、私たちは「どうだったか?」「どう思うか?」「なぜか?」等、様態、感想、理由を問う質問を多用していることに気づく。特に、理由を問う「なぜ質問」は、話し合いの内容が深まれば使用頻度の高まる質問といえるだろう。なぜなら、これは人間の知的活動を駆動するような問いであり、また知的欲求の核となるような問いでもあるといえるからだ。そこで次章において、この「なぜ質問」について考えてみる。

Ⅱ．「なぜ質問」検討

「なぜ質問」は発せられる相手は他者とは限らない。自分自身に自問することも多くある。そこで、本章では、自己に向けられた場合、他者に向けられた場合に分けてその状況、機能、課題の視点から検討し、その内容を考察する。

1. 自己に向けられた時

自分自身に対して「なぜ」と問う時、そこにはなんらかの不安や心配、不満すなわち不安全感が

ある。これはあるべきものを自分が有していないという「弱さ」を自覚することである。たとえば、「なぜ自分は勉強しているのか」、「なぜ自分はこの会社で働いているのか」という問いは、充実した学生生活を送っていたり、仕事に満足している状況では発せられない。現状に対する何らかの不安や不満がある時に発せられる。このような内的な感情の他、「なぜ質問」が問われる状況として意味の探求が考えられる。たとえば悲劇的な事態に遭遇した時、「なぜこんなことが起きたのか」という問いが発せられる。事件、事故、災害は理由なく無作為に、理由なく襲ってくる。このような悲劇を、そのまま受け入れることは難しい。なんらかの意味付けを求めてしまう。また、「なぜ質問」は知的探求の出発点でもある。「なぜりんごが木から落ちるのか」等である。いずれの場合にも自分の中にその答えがないという不全感がある。自明のことに対して敢えて「なぜ質問」を問うことはない。

このような「なぜ質問」の自問自答は、問い続けることによって問題理解を深める機能をもつ。そして、視野の転換や拡大をもたらすことがある。問い続けた問いに対して、ある日突然納得のいく答えを自分で見出す経験である。そして、その答えは、多くの場合「なぜ質問」に対する直接応じるものではなく、位相の異なるものであることが多い。たとえば「なぜ勉強しているのか」という自問を続けることによって、学ぶことそのものの喜びに気づき、当初の問いが意味をもたなくなるという場合である。これは、新たな視野を獲得したという意味で、創造的なコミュニケーションといえるだろう。

しかし、自問自答における「なぜ質問」に課題もある。自分にとって都合のいい意味付けをしてしまいそれで納得してしまう例である [中田 (2015), p.72]。たとえば、会えば口論してしまう友人がいたとする。「なぜあの人と仲良くできないのだろうか」と自問した時、それは相手の性格が悪いからだ、と意味づけてしまう。そしてその相手と仲良くなれた時には、自分が寛大だったからだ、と意味づける。いずれにしても自分にとって都合のいい意味づけである。その意味付けが現実を反映しているとは限らない。おそらく、その相手も同様の意味付けをしているだろう。さらに、既存の一般的な価値観をそのまま内面化して「なぜ質問」への回答として納得してしまう場合もある。「なぜ自分は勉強しているのか」という問いに対して、良い大学に入り、一流企業に就職し、経済的に豊かな生活を送るためだ、と社会一般で言われている意味付けを無批判に受け入れ、納得してしまう場合である。このような時、この自問自答が新たな視点の気づきにつながることはない。この答えが「本当」のものではないと感じていてもその疑念を抑えて納得するようになる。

「なぜ質問」が自己に向けて発せられた時、その問いの答えを自分は有していないという「弱さ」の自覚があり、そこから創造的なコミュニケーションにもつながりうることをみた。では、次に「なぜ質問」が他者に向けられた場合を考えてみたい。

2. 他者に向けた時

「なぜ質問」が他者に向けられて発せられるのは、相手の行動や、共に経験した事件や出来事

に関する情報を欲している場合である。この場合も自問同様、質問者には答えを有していないという自覚があり、またその答えを知りたいという欲求がある。つまり、質問者の内面には不安や心配、不満すなわち不安全感、「弱さ」の自覚がある。

「なぜ、あなたは私にそんなに辛くあたるのか」という問いを考えてみたい。この問いは、相手の行為の理由が了解しえない時に発せられる。「なぜ、あなたはそんなに親切なのか」も同様である。自分にはそんなに親切にしてもらう理由はない、後で見返りを期待されているのではない、等の不安感からこの問いが発せられる。質問者、回答者双方において、その行為が当然のことと了解されている場合は「なぜ質問」は発せられない。子が親に対して「なぜそんなに私のことを大切にしてくれるのか」と問う場面を想像するのは難しい。

ところで、他者に対する「なぜ質問」の機能については情報収集の他、相手への非難、糾弾が挙げられる。たとえば授業に遅れてきた学生に対して、「なぜ遅刻したのか」と問う教師は、遅刻した理由を知りたいわけではない。非難の一表現として「なぜ質問」を使っているのだ。

他者に向けられた「なぜ質問」の課題については、前章で挙げたような質問者の状況を忖度して回答者が応える場合が考えられる。質問者、回答者双方において都合のいい意味付けや物語を前提とした問答である。特に質問者と回答者の間に社会的、経済的、政治的力の格差があり、「強い」立場の者が「弱い」立場の者に対して問うた場合に顕著に表れる。その具体例が、前章で挙げた援助者と被援助者の関係であり、またこれは親子、介護者と被介護者、教師と学生、雇用者と被雇用者においてもみられる。このことは、次に考察するように質問者と回答者の関係性に依っては上記のような問題に陥らない「なぜ質問」が可能であることを示唆している。

「なぜ質問」が他者に向けて発せられた時、そこには「弱さ」の自覚があるのは自問自答の場合と同様である。しかし、他者に向けられた「なぜ質問」が創造的なコミュニケーションとなるか否かについては、質問者と回答者の関係性における力の不均衡が影響していることをみた。

それでは、次に「なぜ質問」が発せられる状況をさらに検討した上で、質問者と回答者の関係性が「なぜ質問」の結果に与える影響について考えてみたい。

3. 考察

以上、「なぜ質問」の背景には、なんらかの不安や心配、不満すなわち不安全感があることを確認した。これは質問者が、ある出来事（自他の行為、状態、特に悲劇的な事態）に直面することで、それまでの価値観や判断基準、常識が揺さぶられる状況に置かれていることを意味する。

2000年から社会問題として論じられている「ひきこもり」は、内閣府が2010年に実施した調査によれば現在も70万人近くいると推計されている〔石川（2015）, p.124〕。統計上の数字に接した時と身近な友人や家族が当事者である場合とではその受け止め方は異なる。当事者となった場合、この事実によって内面が揺さぶられ、等閑視することができない。そして「なぜ質問」が発せられる。この問いに対する答えを見出すことは、この事態の解決策を模索することを意味するからだ。しかしその答えを見つけるのは容易ではない。なぜなら、その事態は質問者のそれま

での経験では理解できないからだ。その時、これを既存の考えに当てはめて答えを出すことで満足するのではなく、答えられないという「弱さ」を認め、受け入れるなら、この困難な状況は創造的なコミュニケーションにつながりうる。

次に、このような創造的なコミュニケーションが成立する状況を、質問者と回答者の関係性から考えてみたい。両者の間で力の不均衡があり、質問者が回答者よりも社会的、政治的、知識量において優位な立場にある場合、回答者は質問者の意図に沿うような回答をする。このような関係性においては、多くの場合、回答者は有形、無形の圧力を受けた状況で回答することになる。そして、回答者は、質問者の期待、予期した回答を答えることになる。なぜなら、回答者が「本当」に思っていることを答えれば不利益を被ることが予測されるからだ。質問者が自ら有する力を利用する意図がなくても同様の結果に至ってしまうことを前章での中田の事例が示している。「なぜ質問」に明快に回答でき、またその内容が一定の説得力をもつという状態は、その回答が既存の支配的な価値観を反映したものであり、その内容で応答するということは、回答者がその価値観を体現する立場にあるからだ。しかし、このような応答からその既存の枠組みを超える創造的なコミュニケーションは期待できない。とはいえ、このような力の不均衡を自覚することで、その弊害を回避する努力は可能である。このような自覚と努力をもって「なぜ質問」が発せられるなら、これは質問者と回答者とが協力して「なぜ質問」に対する答えを求める作業——つまり創造的なコミュニケーション——の契機となりうる。次章において、コミュニケーションのあり方についての「脆弱性」と「一貫性」の視点から「なぜ質問」を分析してみたい。

Ⅲ. コミュニケーションのあり方を通しての検討

下記図1は、コミュニケーションのあり方を示したものである。

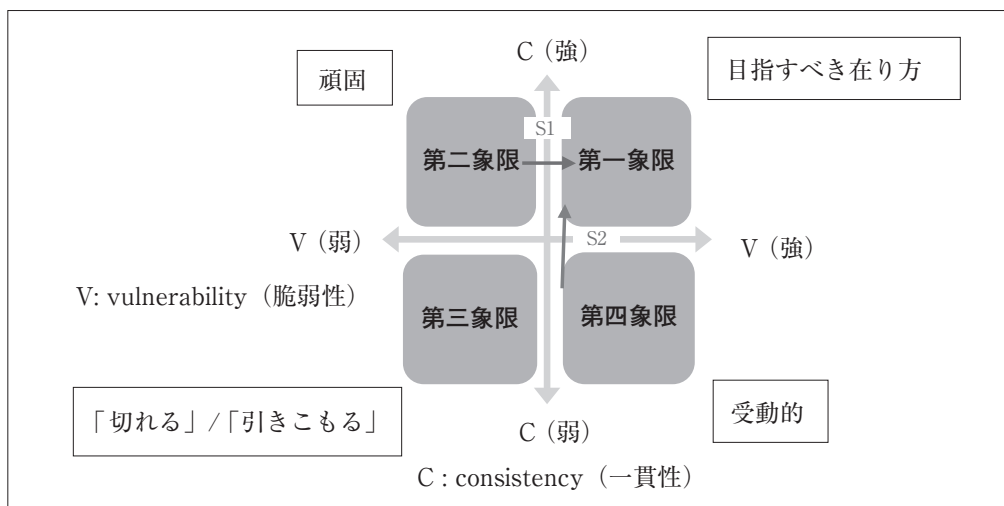


図1 コミュニケーションの四象限

（堀越2013、2016をもとに作成）

横軸の脆弱性（vulnerability）は、他者の意見を受け入れる意思を示す。換言すれば自分の意見の弱さを認める力である。縦軸の一貫性（consistency）は、一貫した自分の意見を有していることを示す。

第二象限は確固とした自分の意見はもっているが他者の意見は受け入れようとしない。平行線に終わる議論である。護憲か改憲か、原発推進か反対か、トランプ大統領支持か反対か等陣営対立が鮮明となる論点においてしばしばみられるコミュニケーションである。第四象限は他者の意見は受け入れるが自分の意見はもっていない（もしくは意識化する機会がないか、意識して自分の意見を抑圧している）状況におけるコミュニケーションである。力関係が不均衡である場合にみられる。第一章でみた、援助者と被援助者の関係はその典型である。第三象限は自分の意見をもたず、また他者の意見も拒絶するような状況である。他者からの働きかけを攻撃的に拒絶する（「切れる」）や、他者からの働きかけを遮断する（「引きこもる」）という形をとる。そして、自分の意見をもちつつ、他者の意見も取り入れることができるようなコミュニケーション（第一象限）が目指すべき在り方として示される。

この図で留意すべき点は、私たちはこの四象限のいずれかに固定的にタイプ分けされるのではなく、状況によって変わりうるということである。同一人物が、ある状況においては自説に固執していたにも関わらず、他の場面では他者の意見は無批判に受け入れてしまったり、コミュニケーションそのものを拒絶するようなこともある。したがって、このことは誰しも意識的に第一象限のコミュニケーションを目指すことが可能であることを意味する〔堀越（2016）〕。

ここで、横軸の脆弱性（vulnerability）と縦軸の一貫性（consistency）について、より詳しくみておきたい。まず、脆弱性（vulnerability）であるが、「傷つきやすいこと」や「弱み」という訳語が当てられるこの語は、傷を意味するラテン語がその語源である。当初身体的な外傷を意味していたが、精神的な外傷も含むようになり、身体的、肉体的に傷つけられやすい状態を指すようになった。近年では、コンピューターネットワークの安全性に問題があり、ハッカーに攻撃されやすい状態が「脆弱性」という訳語で説明される。この意味での脆弱性は、治癒もしくは適切な対応によって改善すべき問題である。この語がなぜ「他者の意見に耳を傾ける力」とつながるのだろうか。

ここでブレナー・ブラウンの議論を参照しておきたい。彼女は「弱さ（weakness）」と「傷つきやすさ（vulnerability）」が異なる意味であることを指摘する。「弱さ」は「攻撃や損傷に耐えられないこと」であるのに対して、「傷つきやすさ」は「傷つきかねない、攻撃や損傷を受けやすい」という意味である。つまり「自分のどこがどのようにもろいのかを認識しないと、傷つく危険性が高くなる」のだ。

さらに、彼女はvulnerabilityを「不確実性、リスク、生身をさらすこと」と定義し、「誰もが求める感情や体験、つまり愛、帰属意識、喜び、勇気、共感、そして創造性は、傷つく可能性からこそ生まれる」と主張する〔Brown（2012）〕。vulnerabilityを以上のように理解することで「他者の意見に耳を傾ける力」が単に他者の話を聞くだけではないことが明らかになる。つまり、

他者から語られたことによって自分が変わるかもしれないという意思の力を意味するのだ。

一方的な変化しかもたらさない情報伝達の代表例は命令である。また、本音を隠した建て前だけのやり取りも双方に実質的な変化をもたらさない。このようなコミュニケーションからは上記に挙げた愛、帰属意識、喜び、勇気、共感、そして創造性は生まれない。たとえば「強制（命令）された愛」を想像することは困難である。裏切られ、傷つくかもしれない弱さを互いにもっていることを認め、それでも関係を維持する意思をもつことが愛することであると思われる。

次に、縦軸の一貫性（consistency）であるが、「一貫した意見をもっているということ」は、現実を評価する価値基準をもっていること、現実の問題に対処する際の判断根拠をもっていること、と言い換えることができるだろう。そしてこのような価値基準や判断根拠はコミュニティにおける日々の生活において形成される。明文化されたものもあれば暗黙に了解されていることもある。この価値基準の目的は、そのコミュニティで暮らす人々のあるべき姿を示すことにありといえるだろう。

さて、第三象限（「引きこもり」「切れる」）が近年みられるようになり、社会問題ともなっていると堀口は指摘する〔堀口（2016）〕。しかし、第四象限もまた社会全体の流れとして確認できるのではないだろうか。つまり、あるべき姿を考えずとも生きていける状況があり、またそのことを多くの人が望んでいるということである。物質的な欲求が満たされ、安心、便利、快適な生活を保障してくれるのであれば、あるべき姿を示す価値基準や判断根拠に照らして、その現状を批判的に検討する必要はないとする風潮である。これは、たとえば経済成長しているのであれば政権与党を批判する必要はないという形で現れる。

あるべき姿は、「本当」の自分の願いや想いを確認、参照し、これを表明することを通して意識化される。このあるべき姿の現実への適用を論じる人がコミュニティの一部の人に限定されるなら、これは命令となり抑圧として働く。しかし、このことをそのコミュニティに属する人々が議論し練り上げていく機会が用意されているのであれば、あるべき姿によって示される理想と現実の齟齬は新しい知見の生まれる場ともなりうる。

このように考えると、一貫した意見をもっているということは、不変の意見をもっているということではない。「本当」の自分の願いや想いを認め、これを受け入れることにより形成される価値基準を有していることを意味する。そして、この価値基準は、状況の変化に応じて、また他者との対話を通して変化し続けていく可能性に開かれたものである。

以上を踏まえて、弱い脆弱性（vulnerability）を強めるために（S1：第二、第三象限から第一、第四象限への移行）、また弱い一貫性（consistency）を強めるために（S2：第三、第四象限から第一、第二象限への移行）必要とされることを考えてみたい。S1については、他者尊重が挙げられるだろう。これは、他者からの働きかけによって自分が変わるかもしれないことを受け入れる意思をもつということである。S2については、自己尊重、自己受容が考えられる。つまり、自分を受け入れることで「本当」に自分が望んでいることを意識化し、それを表明することが可能となる。

では、この四象限において「なぜ質問」がどのような使われ方をするのか、回答者の視点から考えてみたい。第二象限の場合は、回答者のもつ価値観や信念、世界観に基づいて明快な回答がなされる。これは、たとえば引きこもり当事者から発せられる「なぜ学校に行かなくてはならないのか」や「なぜ勉強するのか」という問いに対して、社会的に「成功」した人が「競争に勝ち、社会的地位を得るためだ」と答えるようなものである。第四象限の場合は、質問者もしくは既存の価値観に基づいた回答がなされる。上と同じ「なぜ質問」に対しては「みんな（先生が、親が）そう言っているから」という回答である。第三象限の場合は、そもそも回答することを拒絶するということになる。ところが、第一象限の場合は様々な回答例が考えられる。「一緒に考えてみよう」というような質問者を巻き込むような回答、「答えることができないので助けてほしい」というような助けを求める回答、質問をしてくれたことに感謝の意を表する回答等である。また、ある回答が提示される場合も、「現時点での私の意見では」という留保が加わる。最終回答ではない。ここでは「なぜ質問」は質問者、回答者が共に新たな知見をもたらしうる創造的なコミュニケーションの起点となりうる。一般には、社会的成功を収めるために勉強すべきと言っているが、「成功」とは何か、「学ぶ」とは何かということが問いの遡上に上るからだ。

次章において、このような創造的なコミュニケーションが可能となるコミュニティのあり方を持続可能なコミュニティ実践例を通して検討する。

Ⅳ．創造的なコミュニケーションの現れ方

持続可能なコミュニティ実践の背景にあるのは、現状の暮らしやコミュニティのあり方が持続可能ではないという現状認識である。大量生産、大量消費、大量廃棄を不可避免的に伴う経済成長政策が優先され、地方行政の効率化のもとに都市部に人材、資本、情報が集中する流れが促進され、効率性を優先する経済活動は国際的な巨大資本への依存度を高めている。このような現状は、化石資源の枯渇、気候変動の深刻化という側面だけではなく、コミュニティにおけるコミュニケーションの点からも課題がある。

前章で検討した四象限図を参照するなら、現状の暮らしやコミュニティのあり方の維持に最も資するのは第四象限におけるコミュニケーションである。現状の一般的な価値観を受け入れ、その範囲内であれば「なぜ質問」も効率的に処理することが可能だからだ。しかし、現実の世界は多様な暮らしやコミュニティのあり方が併存している。つまり、異なる価値観、信念、世界観が併存している。それらが衝突した場合、コミュニケーションは第二象限へと移り、主張は平行線をたどる。そして分断か物理的強制力によって一方が他方を抑圧することで結論が出される。また、物質的な豊かさの追求が優先され、それが一定の成果を収めれば第三象限へ後退しコミュニケーションそのものへの意思を失っていく事態も生じる。このようなコミュニケーションはコミュニティを内部から弱体化させ、外的環境の変化への対応も困難となる。では持続可能な暮らしを目指すコミュニティにおけるコミュニケーションとはどのような特徴を有しているのだろうか。

本章では持続可能なコミュニティ形成実践の一例としてトランジション・タウン運動を取り上げ、そこにおけるコミュニケーションのあり方を検討する。トランジション・タウン運動は2005年イギリス南西部デボン州トットネスで始まった。将来必ず到来する化石燃料枯渇と深刻化する気候変動への対策をコミュニティレベルで展開する運動である。2012年現在、世界34か国421市町村でこの取り組みが始まっている。既存の社会のあり方を批判するのではなく、持続可能なコミュニティ形成のための代替案（alternatives）を提案し、実践している。

トットネスを始め、世界で展開するトランジション・タウンの活動を紹介した映像資料の最後には、以下のようなメッセージが示される。「トランジションは大きなスケールの社会実験です。私たちは、この運動がうまくいくかどうかわかりません。ただ、確かなことはもし政府が動いてくれることを待っていたらそれは十分ではないし、遅すぎることになってしまうこと、そして個人で取り組んだとしてもそれは小さすぎるということです。しかし、コミュニティで取り組めばなんとか対応ができるかもしれないし、間に合うかもしれません」[Goude (2012)]。ここで表明されるのは、現状に対する冷徹な分析とコミュニティのもつ力への信頼である。悲壮感はない。コミュニティの一人ひとりの自発性を信じ、やれることをそれぞれやるのがコミュニティの、そしてグローバルな課題解決につながる、と語られる。そして、このメッセージが具体化した様子が、2014年に開かれた地域起業家フォーラム年次大会の映像資料で確認できる[REconomy Centre (2015)]。このフォーラムでは、地域の課題に対して地域住民が解決策を提案し、参加者が皆の前で自分のできる支援を名乗り出る（I pledge...）場面がある。金銭的余裕のある人は寄付で、スキルのある人はその能力の提供で、時間に余裕のある人は作業を手伝うことで、そしてそのいずれももっていないが応援したいという人は、応援しますという意思表示をする⁽²⁾。つまり、地域の課題解決のために必要だと思った人がその実践を提案し、その考えに共感した人ができる範囲でその実践を支援するという方法である。

ここで注目すべきは、必要性を感じた人が自発的に取り組みを提案し、それを聞いてその取り組みに共感した人が、やはり自発的に協力をするという点だ。ここに、強制を伴うコミュニケーションはない。しかし、このような自発性に委ねていては対策が必要な地域の問題が放置され、深刻化してしまうのではないかという疑念が生じる。しかし、コミュニティの当事者が取り組みの必要性を感じないということは、その「問題」は、その時点ではそもそも問題ではないのかもしれない。このようなコミュニケーションのあり方は、日本におけるトランジション・タウンの一つであるトランジション藤野でも確認することができた。

トランジション藤野は2008年に神奈川県相模原市藤野で始まった。現在、森林保全活用活動、地域通貨、食の自給、健康と医療、再生可能エネルギーによる電源供給等の活動を展開している。特に、2011年大震災を契機に巨大な電力供給システムに依存している現状から「自分の電気は自分でつくる、地域の電気は地域でつくる」を目標にして活動を展開してきた電源供給事業（「藤野電力」）はメディアでも度々取り上げられてきた。現在はそれほど活発に活動していないというが、その現状を問題としては捉えていない、この取り組みがまた必要とされる時が来れば

また活性化するだろうとのことだった。

トランジション藤野の立ち上げメンバーの一人である榎本英剛は、持続可能なコミュニティ形成に必要な要素として、「脱依存」「レジリエンス」「創造性」の三点を挙げる。「脱依存」とは、巨大システムに依存した生活から脱し地域で自立した生活をつくっていくこと、「レジリエンス」とは気候変動や経済危機などの急激な環境変化にも地域コミュニティで柔軟に対応できる力をつけることである。この両者を具体化する方法として、地域経済を活性化させることや地域で食料やエネルギーの自給率を高める取り組みが挙げられる。そして「創造性」とは、コミュニティで生活する人々の創造性を活かすことである。この創造性について「私たちは豊富にある再生可能エネルギーを使っていない。それは、私たちのもつ創造性だ。世界には70億人を超える人々が暮らしている。その創造性は使ったらなくなるものではない。しかし、その創造性を活かしていない」と榎本は指摘する〔榎本（2017）〕。

創造性が活かされない最大の原因は強制であろう。強制ではなく自発性を契機とした取り組みを促すために、トランジション藤野では「やりたい人が、やりたいことを、やりたい時に、やりたいだけやる」ようにしているという。このようなコミュニティでは前章で示したS1とS2が促進されるだろう。そして、ここで発せられる「なぜ質問」は創造的なコミュニケーションの始点として働くのではないだろうか。

おわりに

持続可能なコミュニティ形成には創造的なコミュニケーションが必要である。本論における議論の出発点としたメタ・ファシリテーションの「事実質問」は、当事者の内発的な気づきを促すことで創造的なコミュニケーションにつながることを示した。また、強制を背景としない共生を志向したコミュニティにおいては「なぜ質問」が創造的なコミュニケーションの始点になりうることを示した。現状においては、力関係の不均衡を背景とした明示、暗黙の強制力が質問者、回答者にとって都合のいい意味付けを促すコミュニケーションが支配的である。規模が拡大したコミュニティを維持、運営していくためには、未来は予期可能であることが望ましく、創造性の発露はその妨げとなるからだ。この状況では、「事実質問」に基づくメタ・ファシリテーションは創造的なコミュニケーションにつながる有効な手段となる。その一方、生活圏のコミュニティを見直し、そこを基点とした持続可能なコミュニティ形成においては、「なぜ質問」を通して創造的なコミュニケーションを育んでいくことも可能である。

人、物、資本、情報は国境を越えて交流の速度を速めている。この流れを止めることはできない。そうであるなら、70億の「再生可能エネルギー」を活用できるようなコミュニティを意識的に形成していくことが必要であろう。

「事実質問」を基調としたメタ・ファシリテーションは、コミュニケーションの現状を炙り出す。そして、メタ・ファシリテーションがその使用を控えることを勧める「なぜ質問」は、創造的なコミュニケーションが可能となる条件を示す。メタ・ファシリテーションは現状の再検討と

持続可能なコミュニティ形成のための方法論検討に資する視点を提示しているといえるだろう。

注

- (1) 後述するように「メタ・ファシリテーション」では、質問者が「事実質問」を重ねることによって、その質問内容およびその行為を常に意識する——つまり、質問と回答という営み自体の意味を意識する——ことを促す。このようなメタ認知に基づくファシリテーションということで同手法は「メタ・ファシリテーション」と命名された〔和田・中田 (2016), p.118〕。しかし、このような「自分を外から観る」というのはファシリテーションに限らず、自覚的な活動を必要とされるすべての場面において、最も重要な能力〔和田・中田 (2016), p.116〕である。また、類書においても自分の行為を客観視するスキルがファシリテーターには求められると指摘している〔中野・三田 (2013), p.20〕。したがって、ファシリテーションにはそもそもメタ認知が要求されているといえるだろう。したがって「メタ・ファシリテーション」は、屋上屋を重ねる表現ともいえるかもしれないが、「事実質問」がこのメタ認知を簡便な方法で促しうるという意味でこの呼称が採用されたと考えられる。
- (2) より正確には、抱きしめてあげます (hug) という応援の意思表示がなされている。

参考文献

- 石川良子 2015 「社会問題としての「ひきこもり」」『松山大学論集』27巻3号
- 榎本英剛 2017 「ガイアエデュケーション」講演 2017年8月18日
- 中田豊一、和田信明 2010 『途上国の人々との話し方』みずのわ出版
- 中田豊一 2015 『対話型ファシリテーションの手ほどき』ムラのミライ
- 中野民夫、三田地真実 2013 『ファシリテーター行動指南書』ナカニシヤ出版
- 堀越喜晴 2013 竹野 一雄 編 『C.S. ルイスの贈り物』かんよう出版
- 堀越喜晴 2016 立教大学講義 「しょうがい者の視点からみる現代社会」
- Broun, Brené, 2012, *Daring Greatly*, (『本当の勇氣は「弱さ」を認めること』サンマーク出版)
- Goude, Emma, 2012, *In Transition 2.0*, Transition Town
- REconomy Centre, 2015, *3rd Annual Local Entrepreneur Forum 2014*
- <https://www.youtube.com/watch?v=EnDiDxYFRXo&feature=youtu.be>
- 2017年8月30日アクセス